

# 工業高校生の進路選択及び学校生活に対する意識の実態調査

—インテリア科と建築科の比較から—

中原 久志・小山 優希・岡部 愛子

Survey of Students' Career Choice and Consciousness of School Life  
in Technical High School

NAKAHARA, H., KOYAMA, Y. and OKABE, A.

大分大学教育学部研究紀要 第38巻第1号

2016年9月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 38, No. 1, September 2016

OITA, JAPAN

# 工業高校生の進路選択及び学校生活に対する意識の実態調査 ーインテリア科と建築科の比較からー

中原 久志<sup>\*1</sup>・小山 優希<sup>\*2</sup>・岡部 愛子<sup>\*3</sup>

【要 旨】 本研究の目的は、工業高等学校に在籍する生徒の進路選択に影響する学校生活に対する意識に関して探索的に調査し、学校現場における生徒指導の一助となりうる基礎的知見を得ることである。その際、性別や学年間における差異を把握すると同時に、所属する学科であるインテリア科と建築科の比較を行うものとする。工業高校生 469 名を対象とした調査の結果、男女間、学科間、学年間において、学校生活に対する意識に有意な差異が認められた。また、進路選択に対する意識にも同様に差異が見られ、生徒の実態に応じた進路指導の必要性が推察された。

【キーワード】 工業高校 進路選択 学校生活に対する意識 実態調査

## 1 はじめに

本研究の目的は、工業高等学校（以下、工業高校）に在籍する生徒（以下、工業高校生）の進路選択に影響する諸要因に関して探索的に調査し、学校現場における生徒指導の一助となりうる基礎的知見を得ることである。その際、性別や学年間における差異を把握すると同時に、所属する学科であるインテリア科と建築科の比較を行うものとする。

これまで工業高校生の職業に対する意識については、いくつかの先行研究が行われている。例えば、柿原・松浦(1996)は、職業高校生の勤労観に関する認知的な態度と行動的な態度との関連性について検討し、勤労観に関する行動的な態度の「目的をもって向上する態度」は、新入生の方が在校生より高い傾向にあること、勤労観に関する認知的な態度と行動的な態度を測る尺度間に相関があり、両尺度の対応する構成因子間に有意差があることなどを明らかにしている<sup>1)</sup>。山尾・森山(2014)は、工業高校における進路指導のプロセスにおいて、進路を決定しなければならない工業高校 3 年生が、どの程度の進路不決断の様相を呈しているのか、また、それがどの時期に解消されていくものなのかを把握する必要性を述べており、進路指導のプロセスにおける生徒の職業に対する自己効力感と進路不決断との関連性を、縦断的な視点から検討している<sup>2)</sup>。さらに工業高校生の意識について検討した先行研究として、学校生活に対する意識に関する研究が挙げられる。例えば小林(2009)は、工業高校生を対象とした調査から、学

---

平成 28 年 5 月 31 日受理

\*1 なかはら・ひさし 大分大学教育学部生活・技術教育講座（技術科教育）

\*2 こやま・ゆうき 山都町立清和小学校

\*3 おかべ・あいこ 大分大学大学院教育学研究科教科教育専攻技術教育専修

校生活における満足感を検討している。その結果、工業高校に満足しているという生徒の割合が70%と高く、1、2年生よりも3年生のほうが高い満足感を形成していることを明らかにしている<sup>3)</sup>。また、熊谷・佐伯(2005)は、生徒の「学校に来る楽しみ」に関する意識の把握を試みている。工業高校生を対象とした調査から、「学校に来る楽しみ」は、クラスメイト等の友人や部活動が影響しており、学校の好嫌意識については、70%に上る生徒が、学校が好きであることを明らかにしている。また、生徒の居場所に対する意識調査も試みており、学校内で過ごす場所が教室に限定されている傾向も示されている<sup>4)</sup>。

このように、工業高校で学ぶ生徒に工業高校での学習に対する肯定感や自信から将来の職業を展望する意識を持たせ、主体的に学習に取り組む姿勢を養うことが重要な課題となっている。これらの先行研究からわかるように、工業高校生の進路選択に影響しうる諸要因を探索的に把握することは実践的指導を展開するうえで重要な知見であると言える。また、その選択に至る経験や学校生活における意識との関連性を明らかにすることは、喫緊の課題であると考えられる。そして、工業高校は在学する生徒の割合が女子に比べて男子の方が多いことから、性差による支援方法を適切に使い分ける必要性も指摘できる。そのような中で、進路選択に対して十分な支援を1年次から行うことは、生徒の将来的可能性を広げる一助になりうると考えられる。そこで本研究では、このような課題に対応するため、生徒が進路を選択する際に影響する諸要因について探索的に検討する。その際、全体的な傾向とともに、学年、性別、学科による差異について質問紙調査を用いて調査を行うものとする。

## 2 調査方法

### 2.1 調査対象・調査時期

調査対象校として大分県内の工業高校2校と熊本県内の工業高校2校の計4校を設定した。調査対象者は、A高校建築科115名(男子86名、女子29名)、B高校建築科117名(男子77名、女子40名)、C高校インテリア科117名(男子33名、女子84名)、D高校インテリア科120名(男子26名、女子94名)、計469名(男子222名、女子247名)であった。

### 2.2 測定尺度

測定尺度として、対象者の学校生活等における意識を把握することを目的とし、ものづくりの好嫌意識など13項目を設定した。回答形式は「4:とてもあてはまる、3:まあまああてはまる、2:あまりあてはまらない、1:全くあてはまらない」の4件法とした。また、自由記述として、「①希望する進路の実現に向けて工業高校で身に付けておきたいことは何ですか。(以下、進路実現に向けて身に付けておきたいこと)」、「②進路決定に向けて、一番あなたが重要視することはどのようなことですか。(以下、進路決定に向けて一番重要視すること)」、「③現在、自分が希望する進路を教えてください。(以下、希望する進路)」、「④その進路先を選んだきっかけや出来事について教えてください。(以下、進路先を選んだきっかけや出来事)」の4項目を設定した。調査に使用した質問紙を図1に示す。

## 3 調査結果

### 3.1 調査対象者と有効回答

調査の結果、調査対象者469名(男子222名、女子247名)のうち、有効回答は、男子214名、女子236名、計450名で有効回答は95.9%であった。

アンケート

(        ) 年 出席番号 (        ) ( 男 ・ 女 )

このアンケートは、成績には関係ありません。また、皆さんの回答を他の先生や学校に見せたり公開することはありません。今の自分の素直な気持ちを答えてください。また、回答は次の4段階で答えてください。また、インターンシップに行っていない人は14番・15番は未記入をお願いします。

4とても当てはまる				3まあまあ当てはまる				2あまり当てはまらない				1全く当てはまらない			
-----------	--	--	--	------------	--	--	--	-------------	--	--	--	------------	--	--	--

1	工業高校に進学して満足している。	4	3	2	1
2	建築科・インテリア科に興味を持って進学を希望した。	4	3	2	1
3	中学生の時点で、将来の進学・職業に対する具体的なイメージがあった。	4	3	2	1
4	高校入学時から希望する進路先は明確であった。	4	3	2	1
5	座学の授業は好きですか。	4	3	2	1
6	座学の授業は得意ですか。	4	3	2	1
7	実習の授業は好きですか。	4	3	2	1
8	実習の授業は得意ですか。	4	3	2	1
9	ものづくりは好きですか。	4	3	2	1
10	自分は、コミュニケーション能力が高いほうだと思う。	4	3	2	1
11	自分は、意思が強いほうだと思う。	4	3	2	1
12	今、工業高校で学んでいる専門性をいかした職業・進路を選びたいと思う。	4	3	2	1
13	工業高校で学んだ専門的な知識や技能は卒業後に役立つと思う。	4	3	2	1
14	インターンシップは、自分の希望する場所だった。	4	3	2	1
15	進路決定の際、インターンシップでの経験が影響したと思う。	4	3	2	1

1. 希望する進路の実現に向けて工業高校で身に付けておきたいことは何ですか。

2. 進路決定に向けて、一番あなたが重要視することはどのようなことですか。  
(例：先生のアドバイス、勤労体験等)

3. 現在、自分が希望する進路を教えてください。  
(例：〇〇分野への就職、大学・専門学校(学科等具体的に)への進学)

4. その進路先を選んだきっかけや出来事について教えてください。

ご協力ありがとうございました。

図 1 調査紙

### 3.2 調査対象者の状況

調査対象者の状況を把握するために、学校生活等における意識に関する 13 項目において、肯定的な回答をした人数の割合を、全体、男女別、学年別、学科別にまとめた。その際、4, 3 の回答を肯定群, 2, 1 の回答を否定群として集計した(表 1)。その結果、「工業高校進学満足度」は肯定群の割合が高かった。「学科への進学決意」よりも「工業高校進学満足度」が肯定群の割合が高くなっていたことから、不本意入学であっても学校生活を過ごす中で、満足感が得られていくことが予想される。一方、「将来への明確なビジョン」、「入学時からの進路意識」は否定群の割合が高かった。このことから、後述の自由記述の結果にもあるが、進路についてある程度の考えは持っているが、入学時から一貫して明確に持てている生徒は少ないことが考えられる。「座学への好嫌意識」と「実習への好嫌意識」を比較してみると「実習への好嫌意識」の肯定群の割合が高かった。座学等の授業よりも、なにかを実際に自分の手で製作するなど、実践的な作業が生徒の興味・関心を促し、好意識へとつながる可能性が指摘できる。このことは、

表1 学校生活に対する意識に対する肯定群の割合

	全体	男子	女子	1年	2年	3年	インテリア科	建築科
進学満足度	88.7%	89.7%	87.7%	88.2%	85.5%	92.5%	87.8%	89.6%
学科への進学決意	79.3%	80.8%	78.0%	88.2%	71.7%	78.1%	76.9%	81.9%
将来への明確なビジョン	50.2%	53.3%	47.5%	59.9%	39.5%	51.4%	45.9%	54.8%
入学時からの進路意識	35.6%	40.2%	31.4%	43.4%	31.6%	31.5%	34.1%	37.1%
座学への好嫌意識	52.0%	45.3%	58.1%	59.2%	40.1%	56.8%	53.3%	50.7%
座学への得意意識	40.4%	39.3%	41.5%	45.4%	30.3%	45.9%	39.3%	41.6%
実習への好嫌意識	90.4%	92.1%	89.0%	92.8%	86.8%	91.8%	90.0%	91.0%
実習への得意意識	72.9%	77.1%	69.1%	75.0%	67.1%	76.7%	72.1%	73.8%
ものづくりの好嫌意識	89.6%	92.5%	86.9%	94.1%	83.6%	91.1%	87.8%	91.4%
コミュニケーション能力	52.2%	56.1%	48.7%	57.9%	48.0%	50.7%	48.9%	55.7%
意志の強さ	61.6%	63.6%	59.7%	67.8%	53.3%	63.7%	56.8%	66.5%
専門性活用進路選択	66.9%	77.6%	57.2%	80.3%	67.8%	52.1%	57.6%	76.5%
専門的知識・技能の活用への期待	90.9%	93.5%	88.6%	94.1%	92.1%	86.3%	86.0%	95.9%

N=450

「ものづくりの好嫌意識」の肯定群の割合が高いことから推察される。学年間で比較すると2年生で「座学への好嫌意識」、「座学への得意意識」の否定群の割合が高くなっている。これは、学年進行に応じた専門的な学習内容の難化が関係していると考えられる。「実習への好嫌意識」の肯定群の割合が高いのに対して、「実習への得意意識」は否定群の割合が高くなっていた。

「好き」という意識は感覚的なものであると同時に、自己満足ともいえる。一方で、「得意」な意識は、周りの評価・比較の側面が強くなるため、肯定的な考えをする割合は前者に対して相対的に低くなると考えられる。「座学への好嫌意識」、「座学への得意意識」は、肯定群の割合が低かった。座学は、成績がテストの結果に大きく左右されるため成績上位層の生徒のみ「好き」や「得意」の意識をもつ傾向があると考えられ、全体的な傾向としても座学への肯定的な意識をもつ生徒の割合が低くなっていた。「専門的知識・技能の活用への期待」は肯定群の割合が全体的に高かった。しかし、「専門性活用進路選択」の割合は全体的に低かった。男女間は、女子の肯定群の割合が低くなっており、専門的内容と職業を結び付ける際に、職業観に対する意識が性差に関連されやすいことが考えられる。学年間では3年生の肯定群の割合が低くなっていた。進路選択を目前とした際に生じる理想と現実とのギャップにより、「悩み」が生じているものが推察される。学科間では、座学への「好き」意識のみインテリア科の回答が、その他の項目は建築科の方が肯定的な回答が多い結果となった。

### 3.3 自由記述の分類

次に、自由記述の回答について集計した。「進路実現に向けて身に付けておきたいこと」は回答者数が423名、回答率94.0%であった。「進路決定に向けて一番重要視すること」は、回答者数が398名、回答率が88.4%であった。「希望する進路」は回答者数396名、回答率88.0%であった。「進路先を選んだきっかけや出来事」は、回答者数290名、回答率64.4%だった。分析を進めるにあたり、各自由記述をカテゴリ化し、帰納的に分類・集計した。「進路実現に向けて身に付けておきたいこと」については、「資格取得」のようなコメントを【資格カテゴリ】、「基礎的な知識」、「専門的な知識」のようなコメントを【知識カテゴリ】、「ものづくりの技術」のようなコメント【技術カテゴリ】、「人間関係・上下関係」のようなコメントを【コミュニケーション能力カテゴリ】、「規律やルールを守る」、「礼儀」のようなコメントを【規範意識カテゴリ】、「生活習慣」のようなコメントを【健康管理カテゴリ】、「自立性」、「社会性」のようなコメントを【人間性カテゴリ】に分類・命名した。「進路決定に向けて一番重要視すること」に

については、「給与・勤務時間」、「福利厚生」のようなコメントを【勤務条件カテゴリ】、「先生や親からのアドバイス」のようなコメントを【アドバイスカテゴリ】、「離職者数の人数」、「就職率・就職先」のようなコメントを【信頼性カテゴリ】、「学んだこと・得意なことを活かせる仕事」のようなコメントを【能力実用性カテゴリ】、「自分が本当にしたいと思う仕事」、「自分の将来の夢を叶えられるかどうか」のようなコメントを【意志カテゴリ】に分類・命名した。「希望する進路」については、「建築関係の仕事」、「インテリア関係の仕事」のようなコメントを【就職カテゴリ】、「大学」、「専門学校」のようなコメントを【進学カテゴリ】に分類・命名した。「進路先を選んだきっかけや出来事」については、「親が同業」、「インターンシップでの体験から」のようなコメントを【出会い】、「親からのすすめ」のようなコメントを【アドバイスカテゴリ】、「小さい頃からの夢」のようなコメントを【憧れカテゴリ】、「社会貢献したい」のようなコメントを【社会的評価カテゴリ】、「進学したくないから」のようなコメントを【利己中心カテゴリ】に分類・命名した。

### 3.4 男女別の集計・分析

調査対象者の状況を把握する質問項目について、男女別に集計を行った(表2)。表2より、「座学への好嫌意識」、「実習への好嫌意識」、「実習への得意意識」、「ものづくりの好嫌意識」、「専門性活用進路選択」、「専門的知識・技能の活用への期待」に関して、有意差がみられた。「座学への好嫌意識」に関しては、男子よりも女子の平均値が有意に高かった。「実習への好嫌意識」、「実習への得意意識」、「ものづくりの好嫌意識」に関しては、女子よりも男子の平均値が有意に高かった。また、「専門性活用進路選択」、「専門的知識・技能の活用への期待」に関しても、女子よりも男子の平均値が有意に高かった。

次に自由記述のカテゴリ頻度を男女別で分析した(表3)。「進路先を選んだきっかけや出来事」について男女間で自由記述の回答頻度に有意差がみられた。残差分析を行った結果、「憧れ」は女子よりも男子の割合が有意に高く、「利己中心」は男子よりも女子の割合が有意に高かった。このことから、「憧れ」は、男子よりも女子の方が現実的な見方・考え方をしていることが推察される。「利己中心」は、「地元に残りたい」、「家から通える距離がいい」という意見が多数見受けられた。進路選択と同時に、社会生活に対して不安をもつ女子生徒も少なからずいることや、保護者からの助言などから、地元での進路選択を希望することからこのような結果になったと考えられる。

表2 学校生活に対する意識に関する男女間の平均値の比較

	全体		男子(n=214)		女子(n=236)		男女間の t 検定
	平均値	S.D.	平均値	S.D.	平均値	S.D.	
進学満足度	3.34	0.74	3.36	0.73	3.33	0.74	t( 448 )= 0.42 n. s
学科への進学決意	3.21	0.89	3.22	0.93	3.19	0.86	t( 448 )= 0.35 n. s
将来への明確なビジョン	2.58	0.98	2.61	1.02	2.54	0.94	t( 448 )= 0.76 n. s
入学時からの進路意識	2.24	0.97	2.30	1.01	2.17	0.93	t( 448 )= 1.42 n. s
座学への好嫌意識	2.53	0.80	2.45	0.87	2.60	0.71	t( w410 )= 2.03 *
座学への得意意識	2.38	0.75	2.36	0.82	2.40	0.68	t( w410 )= 0.48 n. s
実習への好嫌意識	3.35	0.69	3.42	0.65	3.29	0.73	t( 448 )= 2.03 *
実習への得意意識	2.91	0.75	3.03	0.76	2.81	0.73	t( 448 )= 3.11 **
ものづくりの好嫌意識	3.39	0.72	3.46	0.68	3.32	0.75	t( 448 )= 2.01 *
コミュニケーション能力	2.55	0.81	2.61	0.85	2.49	0.78	t( 448 )= 1.63 n. s
意志の強さ	2.74	0.81	2.78	0.83	2.71	0.79	t( 448 )= 0.90 n. s
専門性活用進路選択	2.92	0.97	3.17	0.91	2.69	0.96	t( 448 )= 5.38 **
専門的知識・技能の活用への期待	3.38	0.68	3.52	0.63	3.26	0.70	t( 448 )= 4.05 **

p<0.05\*    p<0.01\*\*



表3 男女間の自由記述の頻度（進路先を選んだきっかけや出来事）

	出会い	アドバイス	憧れ	社会的評価	利己中心	男女間の $\chi^2$ 検定
男子	25	21	90	5	6	$\chi^2(4) = 9.50$ * $p < 0.05$
女子	30	36	97	7	24	
男子	17.0%	14.3%	<b>61.2%</b>	3.4%	4.1%	
女子	15.5%	18.6%	50.0%	3.6%	<b>12.4%</b>	
	$p < 0.05$			$p < 0.01$		

## 3.5 学科別の集計・分析

調査対象者の状況を把握する質問項目について、学科別に集計を行った(表4)。その結果、「ものづくりの好嫌意識」、「意志の強さ」、「専門性活用進路選択」、「専門的知識・技能の活用への期待」に関して有意な差が見られた。いずれの項目においても、インテリア科に比べて建築科の平均値が有意に高い結果となった。例えば、「ものづくりの好嫌意識」に関しては、インテリア科に比べて建築科の方が、カリキュラム上、構想・設計・製作という一連の流れを通した実習を多く行っていることが理由であると考えられる。「意志の強さ」に関しては、男女間や学年間では有意な差は見られなかったが、学科間における顕著な差であると言える。「専門性活用進路選択」、「専門的知識・技能の活用への期待」に関しては、インテリア科に比べて、建築科の方が専門性を生かした就職先が充実していることなどが指摘できる。

次に自由記述のカテゴリ頻度を学科別で比較した(表5)。「②進路決定に一番重要視すること」について学科間で自由記述の回答頻度に有意差がみられた。残差分析を行った結果、「能力実用性」は建築科よりもインテリア科の割合が高かった。「能力実用性」は、高校で学んだ学習内容を生かした職種を希望するものであり、インテリア科の方がその考えが強いことが推察さ

表4 学校生活に対する意識に関する学科間の平均値の比較

	全体		インテリア(n=229)		建築(n=221)		学科間のt検定
	平均値	S.D.	平均値	S.D.	平均値	S.D.	
進学満足度	3.34	0.74	3.30	0.73	3.39	0.75	t(448) = 1.27 n.s
学科への進学決意	3.21	0.89	3.16	0.89	3.26	0.89	t(448) = 1.25 n.s
将来への明確なビジョン	2.58	0.98	2.51	0.95	2.65	1.00	t(448) = 1.53 n.s
入学時からの進路意識	2.24	0.97	2.20	0.98	2.27	0.96	t(448) = 0.77 n.s
座学への好嫌意識	2.53	0.80	2.52	0.72	2.54	0.87	t(448) = 0.25 n.s
座学への得意意識	2.38	0.75	2.34	0.67	2.42	0.82	t(448) = 1.07 n.s
実習への好嫌意識	3.35	0.69	3.30	0.71	3.41	0.68	t(448) = 1.69 n.s
実習への得意意識	2.91	0.75	2.86	0.74	2.97	0.77	t(448) = 1.53 n.s
ものづくりの好嫌意識	3.39	0.72	3.32	0.74	3.46	0.69	t(448) = 2.04 *
コミュニケーション能力	2.55	0.81	2.50	0.78	2.59	0.85	t(448) = 1.18 n.s
意志の強さ	2.74	0.81	2.66	0.76	2.84	0.85	t(448) = 2.40 *
専門性活用進路選択	2.92	0.97	2.70	0.96	3.14	0.92	t(448) = 5.01 **
専門的知識・技能の活用への期待	3.38	0.68	3.21	0.73	3.57	0.57	t(443) = 5.91 **

$p < 0.05$  \*  $p < 0.01$  \*\*

表5 学科間の自由記述の頻度（進路決定に一番重要視すること）

	勤務条件	アドバイス	信頼性	能力実用性	意志	学科間の $\chi^2$ 検定
インテリア	132	45	41	32	49	$\chi^2(4) = 16.39$ ** $p < 0.01$
建築	95	65	36	12	32	
インテリア	44.1%	15.1%	13.7%	<b>10.7%</b>	16.4%	
建築	39.6%	<b>27.1%</b>	15.0%	5.0%	13.3%	
	$p < 0.01$		$p < 0.05$			

れる。「アドバイス」は、職業や職種としての専門性の広さなどが影響し、教員や先輩、家族からのアドバイスに対する意識が建築科の方が強いことが考えられる。

### 3.6 学年別の集計・分析

調査対象者の状況を把握する質問項目について、学年別に集計を行った(表 6)。その結果、「工業高校進学満足度」、「学科への進学決意」、「将来への明確なビジョン」、「入学時からの進路意識」、「座学への好嫌意識」、「座学への得意意識」、「実習への好嫌意識」、「実習への得意意識」、「ものづくりの好嫌意識」、「専門性活用進路選択」、「専門的知識・技能の活用への期待」は学年間で有意差がみられた。「工業高校進学満足度」は、3 年生の平均値が高く、1・2 年生が同程度の結果となり、高校生活を過ごしていく中で、満足感が得られていくことが推察される。「学科への進学決意」と「将来への明確なビジョン」は、1・3 年生が高く、2 年生が低い結果となった。これは、2 年生は学校生活や進路選択に対して、中だるみになってしまう時期であることが推察される。「入学時からの進路意識」は、1 年生の平均値が高く、2 年生と 3 年生が低い。1 年生のときは入学して間もないこともあり意識が高いことが予想される。座学への好嫌意識と座学への得意意識は、1・3 年生の平均値が高く、2 年生では低くなっている。1 年生は、中学校とは違う専門科目に対して意欲的に取り組んでいること、3 年生は進路への意識から、もしくは、2 年生が相対的にほかの学年に比べて、学習内容の難化などの影響が推察される。「実習への好嫌意識」は、2 年生よりも 1 年生の平均値が高く、1 年生と 2 年生との間でのみ有意差がみられた。「実習への得意意識」は、2 年生よりも、3 年生の平均値が高く、1 年生は 3 年生と同程度であった。1 年生に関しては、「座学の好嫌意識」、「得意意識」と同様のことがいえると予想される。3 年生は、好きだから得意と感じるというよりは、自己評価・他者評価を経て自己理解ができている状態にあるために、得意という意識が高くなっているのではないかと推察される。2 年生の平均値が低いのは、学校生活への慣れが生じ、1 年生のときにあった意欲が低下傾向になっており、3 年生のように目前に迫った進路選択といった大きな目標が掲げられていないためにこのような結果がでた可能性が指摘できる。「ものづくりの好嫌意識」は、2・3 年生に比べて 1 年生の平均値が高かった。実際にものづくりを行う実習における題材が基礎・基本的な内容で作業に達成感があることや、使用したことがない機械や工具に対する期待感などが推察される。「コミュニケーション能力」と「意志の強さ」に関しては、学年間で有意な差はみられなかった。「専門性活用進路選択」は、1 年生の平均値が最も高く、学年が上がるごとに下がっている。1 年生は入学して間もないこともあり、高校生活への憧れや、その後の進路への期待が大きく、専門内容への興味・関心が高いことが考えられる。学年が上がるにつれて、専門的な学習内容が難しくなっていく、つまずきが生じることや他者評価のなかで模索し、自信を喪失してしまうこと、やらなければいけないこととやりたいこととのジレンマなどがその原因として挙げられる。また、進路について、理想としていたものと現実とのギャップに苦しみなど結果的に様々なことが作用し専門を活かす職業・進路を目指さなくなってしまうと考えられる。さらに、「専門的知識・技能の活用への期待」でも同様の傾向が予想される。

次に自由記述のカテゴリ頻度を学科別で分析した(表 7)。「進路の実現に向けて身に付けておきたいこと」の学年間に関して自由記述の回答頻度に有意差がみられた。残差分析を行った結果、「資格」、「技術」では 1 年生の割合が高く、「人間性」は 2 年生の割合が高くなっており、



「コミュニケーション能力」は3年生の割合が高かった。このことから、「資格」は、1年生の

表6 学校生活に対する意識に関する学年間の平均値の比較

	全体		1年(n=152)		2年(n=152)		3年(n=146)		一元配置分散分析
	平均値	S.D.	平均値	S.D.	平均値	S.D.	平均値	S.D.	
進学満足度	3.34	0.74	3.32	0.72	3.20	0.73	3.52	0.74	$F(2, 447) = 7.48$ **
学科への進学決意	3.21	0.89	3.41	0.80	2.99	0.91	3.23	0.92	$F(2, 447) = 8.87$ **
将来への明確なビジョン	2.58	0.98	2.76	0.91	2.33	0.97	2.64	1.01	$F(2, 447) = 8.07$ **
入学時からの進路意識	2.24	0.97	2.45	0.92	2.10	0.96	2.15	0.99	$F(2, 447) = 6.07$ **
座学への好嫌意識	2.53	0.80	2.63	0.78	2.35	0.79	2.61	0.79	$F(2, 447) = 6.05$ **
座学への得意意識	2.38	0.75	2.49	0.72	2.19	0.70	2.47	0.79	$F(2, 447) = 7.83$ **
実習への好嫌意識	3.35	0.69	3.44	0.69	3.24	0.71	3.38	0.68	$F(2, 447) = 3.46$ *
実習への得意意識	2.91	0.75	2.95	0.74	2.76	0.74	3.03	0.75	$F(2, 447) = 5.17$ **
ものづくりの好嫌意識	3.39	0.72	3.55	0.69	3.26	0.76	3.36	0.68	$F(2, 447) = 6.49$ **
コミュニケーション能力	2.55	0.81	2.59	0.85	2.50	0.78	2.55	0.81	$F(2, 447) = 0.49$ n. s.
意志の強さ	2.74	0.81	2.84	0.83	2.62	0.72	2.78	0.86	$F(2, 447) = 2.98$ n. s.
専門性活用進路選択	2.92	0.97	3.19	0.84	2.90	0.90	2.65	1.09	$F(2, 447) = 12.17$ **
専門的知識・技能の活用への期待	3.38	0.68	3.53	0.65	3.36	0.64	3.26	0.72	$F(2, 447) = 6.32$ **

$p < 0.05$  \*  $p < 0.01$  \*\*

表7 学年間の自由記述の頻度（進路実現に向けて身に付けておきたいこと）

	資格	知識	技術	コミュニケーション能力	規範意識	健康管理	人間性	学年間の $\chi^2$ 検定
1年	45	52	53	16	43	7	8	$\chi^2(12) = 51.36$ ** $p < 0.01$
2年	20	54	33	39	43	5	24	
3年	16	37	27	42	49	9	14	
1年	<b>20.1%</b>	23.2%	<b>23.7%</b>	7.1%	19.2%	3.1%	3.6%	
2年	9.2%	24.8%	15.1%	17.9%	19.7%	2.3%	<b>11.0%</b>	
3年	8.2%	19.1%	13.9%	<b>21.6%</b>	25.3%	4.6%	7.2%	
	$p < 0.01$		$p < 0.01$	$p < 0.01$			$p < 0.01$	

うちから資格取得を行い、1年から2年と年を追うごとに資格の級をあげていくことで難易度が高くなり、取得を諦める気持ちから、割合が低くなっているのではないかと予想される。また、3年生では、明確な進路希望があり、必要最低限での取得のみに留まってしまうことが推察される。「技術」は、1年生のときは、基礎・基本となる技術を学ぶために必要性を感じる生徒が多いことや、進路につながるスキルに関するイメージが強いことが考えられる。「人間性」は、アンケートの調査時期(7月～9月)に関連し、2年生に対して、教員からの3年生の進路状況の話などが多くなっていること、また、2年生は特に学校生活において、部活などの学校生活全般における上級生と下級生の間にいることから、円滑な人間関係の必要性を求めていることなどが考えられる。「コミュニケーション能力」は、3年生の割合が高く、時間経過による影響があると考えられる。学年が上がるごとに学校生活の中でも、周りとの関係性の大事さに気づき、進路選択の上でも、コミュニケーション能力の必要性を感じやすいと考えられる。

#### 4 まとめと今後の課題

本研究の範囲内で得られた知見より、以下を本研究の結論とする。

男女間、学科間、学年間による工業高校生独自の意識や進学満足度、入学時段階での進路意識の差が進路選択に深く影響していることから、中学校と高等学校での進路面・学習面で密接な連携を図ること、また、進路ガイダンスの充実や専門内容の実習や座学における個に応じた教育的配慮が必要であると考えられる。また、教育現場において、生徒が工業高校独自の意識や満足度を教員が把握することは困難であることから、画一的な進路指導を行うのではなく、生徒の認知的実態に応じた支援方法を絶えず考察し続けることが重要であることが指摘できる。

しかし、本研究には次のような課題が残されている。第一に、本研究においては、工業高校生の進路選択に関する諸要因を自由記述をもとにカテゴリ化したため、未だ進路選択に至っていない生徒を含めて分析対象としたため、より明確化した回答をもとに、詳細な分類をする必要がある。第二に、本研究での調査対象者はインテリア科と建築科のみに対象者を絞っていたため、工業高校に設置されているその他の学科でも実態調査を行い、分析・検討する必要がある。第三に、本調査は、生徒自身の認知的実態に視点を当てたものであったため、教員側からの視点を調査し、進路指導における生徒と教員の考えや指導方法との関連性を考察する必要がある。本研究で得られた知見の追試とともに、これらについてはいずれも今後の課題とする。

### 参考文献

- 1) 柿原長弘・松浦正史：職業高校に学ぶ生徒の勤労観に関する認知的な態度と行動的な態度との比較，日本産業技術学会誌，第38巻，第2号，pp.77-84（1996）
- 2) 山尾英一・森山潤：工業高校3年時における生徒の職業に対する自己効力感が進路不決断に及ぼす影響，日本産業技術教育学会誌，第56巻，第3号，pp.205-214(2014)
- 3) 小林清太郎：工業系高校の一層の飛躍を目指して，実教出版株式会社，工業教育資料323号，pp.12-16（2009）
- 4) 熊谷昌彦・佐伯和也：工業高校の生徒の居場所について-生徒の意識から見た山陰の工業高校の現状と課題1-，日本建築学会学術講演便概集，pp.195-196（2005）

## Survey of Students' Career Choice and Consciousness of School Life in Technical High School

NAKAHARA, H., KOYAMA, Y. and OKABE, A.

### Abstract

The purpose of this study is to investigate the consciousness of school life of students enrolled in a Technical High School that affects the career choice of those students. In the investigation, a comparison was made between students of different genders, grades, and departments. The subjects of investigation were 469 technical high school students. As a result, significant differences were observed in the consciousness of school life between boys and girls, and between their departments and grades. In addition, similar differences were observed in their consciousness of career choice.

【Key words】 Technical High School Student, Career Choice, Consciousness of School Life, Survey

